

## 第5回『スラヴ世界：宗教的伝統と文学』国際学会に参加して

山路 明日太

2014年5月20～22日、デルジャーヴィン名称国立タンボフ大学にて催された第五回国際学会『スラヴ世界：宗教的伝統と文学』に参加する機会を得た。この会議は今年、生誕二百年を迎えるレールモントフを記念するものにもなっており、日本ロシア文学会のホームページ上でも案内記事が掲載されていたこともあって参加を決意するに至った。わたしは全ロシアレールモントフ学会やレールモントフ研究会といった、作家その人に捧げられる学会に何度か参加した経験があったが、そうした目から見てレールモントフに関していえば少し小規模の印象を受ける大会だった。また、会場に赴き2種類のプログラムを渡されて初めて気づいたのだが、この会は国際学会であると同時に大学の学生向け国際セミナー『文学と文化コミュニケーションの現代的諸問題』のカリキュラムの枠組に入ってもいた。すなわち、学生の単



初日、歓迎会

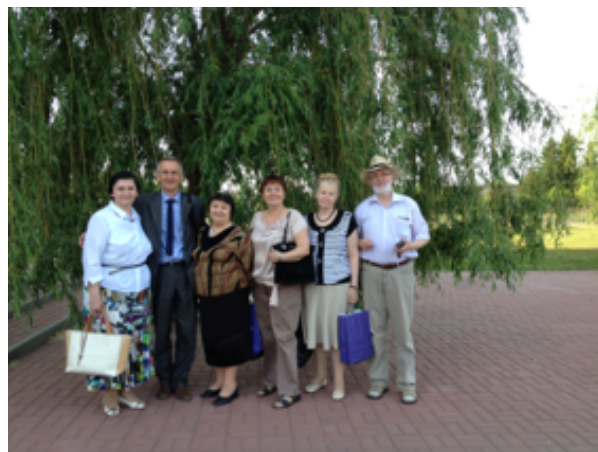
位修得と関わる授業の一環にもなっていたのだ。実際、自分の発表の場にも中国系やアフリカ系の留学生を含め多くの学生が聴講に来ていて、その点でも興味ぶかい体験となった。

学会の発表者はロシア人が多数を占めていたが、ベラルーシ、チェコ、ポーランド、ドイツといった国々からも来ていて、日本からの参加者はわたし一人だった。なお、ウクライナからも何人か参加予定だったがこのたびの国際情勢を鑑み取りやめたとのことだった。

発表数は、全部で59、そのうちレールモントフに関する発表が23であった。総会開会前に学生向け国際セミナーの枠組で、ペルミ国立民族研究大学教授ボリス・ミハイロヴィチ・プロスクールニン氏による特別講義が行われた。テーマは英国ヴィクトリア



初日、総会での発表



二日目、タンボフ大学構内にて。



タルハーニ、レールモントフ像

朝文学のロシア文学に対する影響に関するものであり、とても面白かった。この学会全体に共通していえることでもあるが、外国文学の視点から見たロシア文学というテーマ設定が通底しているようだ。特にロシア人の研究者たちはヨーロッパ／アメリカ文学を専門とする人が多く、そうした観点からロシア文学が論じられていた。

学会は初日に総会の枠内で6つの研究発表、二日目は4つのセッションに分かれて、残り53の研究

発表が行われた。わたしの研究発表は初日の総会の最後に割り当てられていた。「『リゴフスカヤ公爵夫人』における絵画作品群の機能」と題した発表を行ったが、大きな関心を持って聞いてもらえたようだった。何人かの研究者たちが発表後わざわざ近寄ってきてくれ、面白かったと言ってもらえたのはとても嬉しかった。総会の中ではレールモントフに関しては、別の学会でも一緒した

ことのあるタンボフ大学准教授ガリーナ・ボリーソヴァ・ブヤーノヴァ氏による『デーモン』に関する発表、タンボフ府主教フェオドーシー氏によるレールモントフの精神世界を中心に取りあげた発表があった。そのほかの発表では、ベラルー



タルハーニ、風景

シ出身のルカシャネッツ氏によるスラヴ学研究の今後の見通しについて述べたものや、チェコ出身のマレック・プルジホーダ氏によるロシア動乱時代の伝承文学を巡る考察も、大変興味ぶかかった。総会后、学生たちによるコサックダンスが披露され、その後場所を変えて歓迎会が催された。

二日目の4セッションは「現代人文科学研究におけるレールモントフの遺産：レールモントフとタンボフ」、「スラヴ人の宗教的伝統と国民口承文化、文学とジャーナリズム：相関関係の諸問題」、「国民文学における言語的個性、ジャンル構造とディスコース詩学の諸問題」、「スラヴ世界と文学をとおした国際的コミュニ



レールモントフの墓



ケーション」というテーマに分けられていた。わたし自身はレールモントフのセクションに参加した。それぞれ興味ぶかいテーマの発表であったが、なかでも面白かったのが絵画表象を専門とするM.K.ポポーヴァ氏によるレールモントフ作品集の表紙カバーに関する発表であった。表紙の時代的流行の変遷、飾りに関する説明、ヴィクトリア朝文学がロシア文学の表紙に与えた影響などがわかりやすく説明されていた。氏の発表は表紙を装飾的なもの、アカデミックなもの、レールモントフの肖像付きのものなどに分類すると共に、個々の表紙カバーが物語の内容をどのように伝えているかという点についてまで踏み込んでいた。翌22日、今度は学生向けセミナーの枠組で、ポポーヴァ氏が講義をされていたが、それはラファエロ前派の絵画に関するものであり、大変勉強になった。

学会そのものもとても面白かったのだが、その前後に設けられたタンボフ観光やタルハーニ観光は忘れられない思い出となった。タンボフの市内観光は学会初日の夕方ブヤーノヴァ氏が時間を割いて特別に連れて行ってくださり、市の礎となった場所や『タンボフ県の会計官夫人』ゆかりの地、ちょうど百年前生誕百年を記念して建てられたレールモントフ像などについて、詳細に興味ぶかい説明をしてくださった。また学会終了翌日の23日にはレールモントフの祖母エリザヴェータ・アレクセーエヴナ・アルセーニェヴァの領地であり、詩人の現在の墓地のある土地、ペンザ県タルハーニに学生や他の研究者たちと共に片道3時間のバス旅行に出かけることができた。このときもブヤーノヴァ氏がガイド



タンボフ市内のレールモントフ像

を務められた。真っ白な雲が所々浮かぶ深い青の空に、絵に描いたような風車小屋や教会、邸宅、池が見える。これまでに何度も薦められていながらなかなか行く機会がなかった。それにしてもこれほどまでに美しい土地だとは思ってもいなかった。心より感謝している。

(やまじ あすた、中京大学)